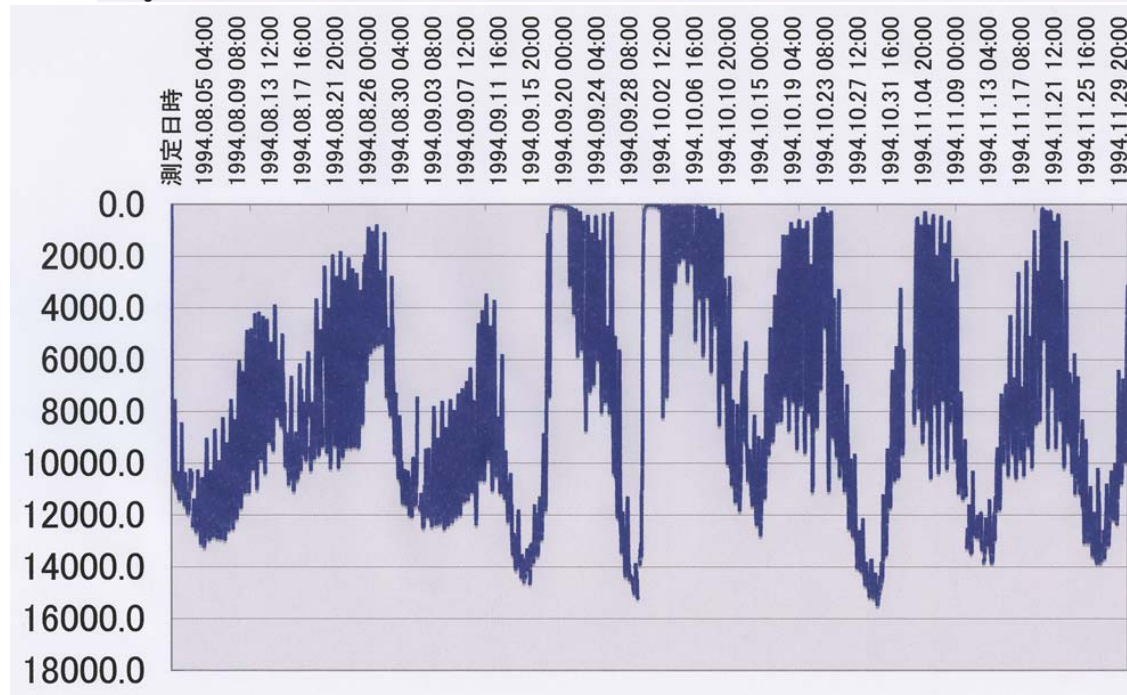
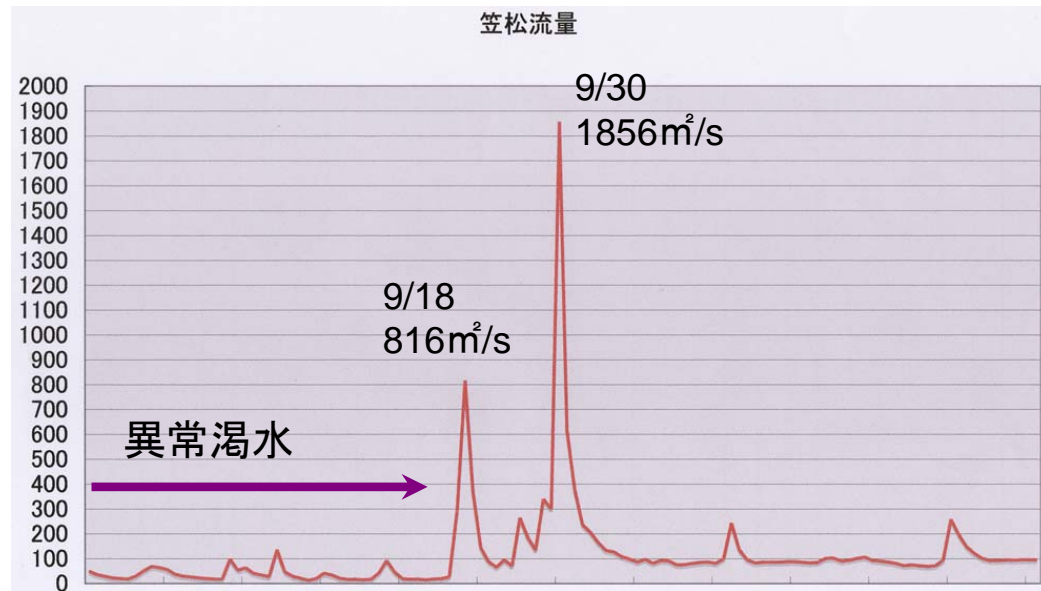


## ヤマトシシ`ミに導水路は必要かー追加資料 (08.3.31)

- シンポジウム発表時には、木曾川成戸地点流量のデータがなく、分析に不十分な点があったが、3月29日に木曾川笠松地点の流量データが入手できたので(情報公開)、より詳しい分析が可能になった。
- 笠松流量は、木曾川大堰湛水域のすぐ上流笠松観測所で記録されたものである。木曾川大堰地点まで、木曾川用水など最大 $37.46\text{m}^3/\text{s}$ の利水権があり、成戸流量とは異なるが、連絡導水路による「緊急水」の効果の検討に利用できる。

# 緊急水の効果は？

平成6年の異常湧水が解消された9月18日の出水は、8.7 km 地点の塩水を一掃したが、これは一時的で、次の小潮時は、成戸地点流量が $100\text{m}^3/\text{s}$ 以上であったにもかかわらず、塩化物イオン濃度は異常湧水時の濃度以上に増加した。



# 緊急水の効果は？

1995年渇水時末期9月15、16日に、木曾川成戸地点流量はそれぞれ100、200m<sup>3</sup>/s以上に増加した。しかし、8.7 km地点の塩分は、これらの流量でも増加し続け、17日の12:00には塩化物イオン濃度14200mg/lを記録した。17日の出水(日平均783m<sup>3</sup>/s)は一時的に塩水を排除したが、2日後の19日には15000mg/l以上に増加している。つまり、100~200m<sup>3</sup>/s程度の流量では、小潮時の塩水クサビの形成パターンや底層の塩分濃度にほとんど影響しない。

したがって、異常渇水時における16m<sup>3</sup>/sの「緊急水」が、塩分濃度を薄めて、ヤマトシジミへの悪影響を緩和するという国土交通省の見解は間違いであろう。

